

[062_2025]第62回貴重文物展示：炭鉱札：法的グレーゾーンの「お金」のようなもの

<https://hdl.handle.net/2324/7437547>

出版情報：展覧資料, 2025-12-09. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：



1. はじめに

^{たんこうさつ}炭鉱札とは、^{きんけん}斤券、金券、炭券、切符などさまざまな名称で呼ばれたものの総称です。炭鉱で働いた労働者たちに、賃金の一部または全部として支払われました。おもに会社の購買所などで利用することができましたが、会社外でも利用できた炭鉱札もあったといわれています。明治 20 年代から大正中頃までが全盛期でした。

このたび、九州大学附属図書館付設記録資料館の産業経済資料部門(旧石炭研究資料センター)が蒐集した炭鉱札の一部を展示することになりました。立派に印刷されたお札のような炭鉱札から、これが賃金の一部かとちょっと心配になってしまうような粗雑な炭鉱札まで、いろんな炭鉱札があります。

約 2,000～3,000 種の炭鉱札が発行されたのではないかという推計もありますが、現存している炭鉱札はわずか 200 種類ほどです。その珍しい炭鉱札を、ぜひともこの機会に見ていってください。

2. 炭鋤札のはじまりと法的な位置づけ

先ほど炭鋤^{たんこうさつ}札の全盛期は明治 20 年代からと記しましたが、そのはじまりは江戸時代にまでさかのぼることができます。その最初期の炭鋤^{みいけはん}札は、三池藩(立花家、1 万石)の焚石山^{たきいしやま}役所から発行されたものでした。のちに明治政府に引き継がれて官営となり、さらには三井^{みつい}へと払い下げられて三井鋤山三池炭鋤となる炭鋤です。

このように江戸後期から明治初期にかけて炭鋤札を発行する炭鋤もみられましたが、1890(明治 23)年に鋤業条例がだされると、金銭以外での賃金の支払いが禁止されてしまいます。

あれれ？

注意深い人は気がついたと思いますが、炭鋤札の全盛期である明治 20 年代から大正中頃にかけて、炭鋤札は脱法的なグレーゾーンな存在として流通していたのでした。



三池炭礦〔全景〕

3. 会社側のメリット

経営側が労働者の賃金の一部または全部を、金銭ではなく炭鉱札たんこうさつを使用した目的はいくつかありますが、その最大のものは運転資金の確保でした。炭鉱札で賃金を支払い、労働者が会社の購買部うりかんば(売勘場などと呼ばれた)で物品を購入すれば、会社側はその分の金銭を節約することができます。

またひどい場合にはある日突然、会社が閉鎖してしまい、労働者には使えなくなった炭鉱札だけが残されたなんてケースもいくつかありました。これも、運転資金のショートを、炭鉱札によって先延ばしにしていただけだったのです。

他にも、会社の購買部でしか使えない炭鉱札によって、労働者の移動(転職・逃亡)を防止する効果などもありました。面白いところでは、会社が賃金で払うような少額貨幣を準備するのはなかなか大変で、その代替として炭鉱札が利用された側面もあります。

4. 労働者側のメリット

会社の経営的なメリットばかりで、労働者は搾取されていただけだという見方もあります。しかし、労働者側にも炭鋤札^{たんこうさつ}を利用するメリットがありました。

当時の金銭による賃金の支払いシステムは、月に2回の支払いでした。そのため、もし金銭で給料をもらうと、半月間を自分で金銭を管理して生活しなければいけませんでした。しかし、まだ家計管理なんていうことを人々が考えはじめる前の時代です。宵越し^{よいご}の金は持たない江戸っ子ではありませんが、もらった賃金をすぐに使ってしまう労働者もたくさんいたのです。

炭鋤札は、その日の労働量に応じて支払われます。そのため、家計の管理なんていうものを考えたことがない労働者たちであっても、日々支払われる炭鋤札を持って、購買部で食品や酒を買い込めば、毎日の生活することができたのです。

5. 炭鉱札を発行した炭鉱

^{たんこうさつ}炭鉱札の全盛期だった明治 20 年代から大正中頃にかけて、^{ちくほう}筑豊地域では財閥系の大炭鉱から中小炭鉱にいたるまで、ほぼすべての炭鉱が炭鉱札を発行していたといえます。

ただし、会社側のメリットのところで説明したように、会社の運転資金のためというのが炭鉱札を発行する一番大きな理由でした。そのため、大炭鉱よりは中小炭鉱の方が、積極的に炭鉱札を発行していたようです。

しかし中小炭鉱だけではなく、^{みつ い}三井、^{みつ びし}三菱といった中央の財閥系の炭鉱や、^{かいじま}貝島や^{あ そう}麻生などの地元の財閥系の炭鉱なども、炭鉱札を発行していました。こんなところからも、会社側のメリットだけではなく、労働者側のメリットもあって炭鉱札が発行されていたことがわかります。

6. 炭鉱札の額面

炭^{たん}鉱^{こう}札^{さつ}の表面には、漢数字とともに「^{きん}斤」という単位が書かれています。「^{しやっかんほう}斤」というのは尺貫法における重さの単位で、下のような換算式となります。もともとは、炭鉱労働者が採掘した石炭の量におうじて、数量が書かれた炭鉱札が渡されていました。

$$1\text{斤} = 16\text{両} = 160\text{ ^{もんめ}匁} \div 600\text{g}$$

しかし、しだいに重さの単位としての「^{けいがいか}斤」は形骸化していきます。

先ほど記したように、鉱業条例によって炭鉱札は脱法的なものとなります。それに前後して、^{えん}円・^{せん}銭・^{りん}厘の「厘」のかわりに「斤」が用いられるようになっていきました。「1斤=1厘」ですから、「50斤=5銭」「100斤=10銭」「500斤=50銭」「1,000斤=1円」の価値が、それぞれあるとされたのでした。

7. 主な炭鉱① 麻生鯰田炭鉱

^{かいじま}貝島家・^{あそう}安川松本家とならんで^{ちくほう}筑豊御三家とよばれる^{あそう}麻生家が開発した炭鉱で、^{かまぐんなまずたむら}嘉麻郡鯰田村(現・飯塚市鯰田)にありました。麻生家で炭鉱の父とされる^{あそうたきち}麻生太吉(1857-1933、のちに衆議院議員・貴族院議員)が開発した炭鉱です。麻生家の初期の炭鉱経営をささえた、重要な炭鉱です。

券面に、「^{うりゅうちょうえもん}瓜生長右衛門」という名前がみられる炭鉱札があります。麻生太吉に代わって、炭鉱札に署名をしていました。麻生太吉の寺小屋時代からの親友でもあり、その右腕として麻生炭鉱を支えた人物として知られています。

鯰田炭鉱は麻生家による開発ののち、はやくも1889(明治 22)年には^{みつびし}三菱へと売却されることになります。その後、1970(昭和 45)年まで三菱によって経営が行われることになる、優良な炭鉱でした。



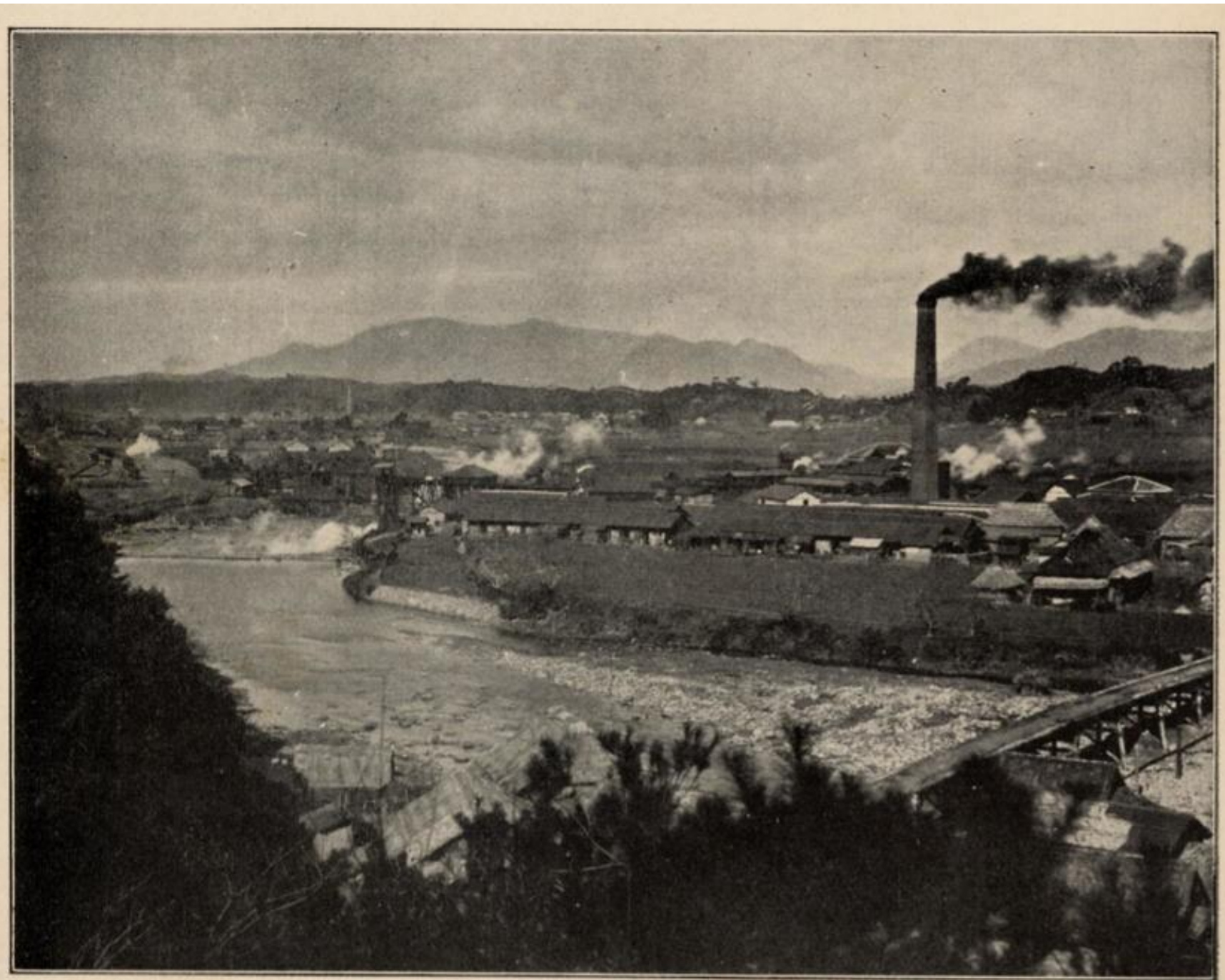
麻生太吉

出典：『麻生太吉傳』 1934 年，麻生太吉伝刊行会

8. 主な炭鉱② 峰地炭鉱

峰地炭鉱^{みねじ}は、田川郡宮尾村(現・田川市、かつての^{ごとうじまち}後藤寺町)にあった炭鉱です。のちに衆議院議員となる^{くらうちじろさく}蔵内次郎作(1847-1923)が、^{くらち}親戚の久良知政市とともに開発しました。今回紹介している^{たんこうさつ}炭鉱札は立派な札であるためか、ほかの炭鉱札とは違って、珍しく現在までたくさん残されています。500^{きん}斤札や1,000 斤札という、比較的高額な炭鉱札がのこされていることも特徴だといえるでしょう。

蔵内次郎作によって設立された蔵内鉱業所は、峰地炭鉱につづき大峰炭鉱も開発するなど、孫の^{くらうち}蔵内^{じろべえ}次郎兵衛(1892-1967)によって経営を拡大していきます。そのため、^{いとうでんえもん}伊藤伝右衛門による大正鉱業とともに^{ちくほう}筑豊御三家に次ぐ、地元の大資本として知られました。(ただし峰地炭鉱は、1939(昭和 14)年に古河工業へと売却されています。)



坑炭地峰郡川田國前豊

豊前国田川郡^{みねじ}峰地炭坑

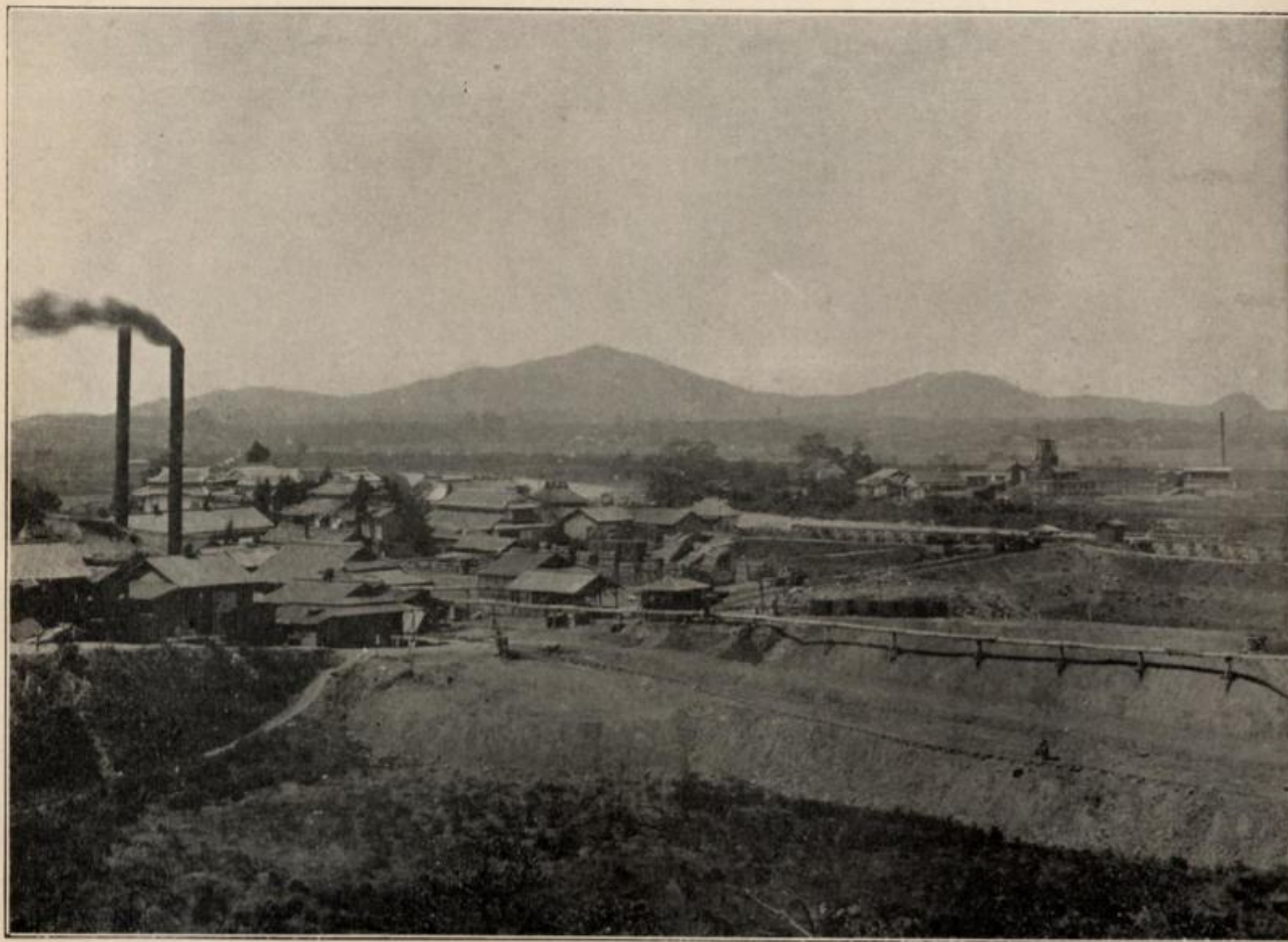
(『筑豊石炭鉱業会月報』4(44), 1908)

9. 主な炭鉱③ 御徳炭鉱

明治中頃に、海軍省が軍艦用の石炭のために所有していたのが御徳炭ごとく鉱です。しかしながら、周辺域から斜めに盗掘をする事件が多発してしまいます。また石炭の品質が、軍艦の練習用には使えても、戦時に最高船速で航行するためには不十分でした。そのために 1899(明治 32)年には、民間へと払い下げられることになりました。

落札したのは、元海軍大主計だいしゅけいで田川採炭株式会社などでも働いた千早正次郎ちはやしょうじろう(1856-1931)と、海軍御徳炭鉱の近隣で別の御徳炭鉱を経営していた堀三太郎さんたろう(1866-1958、のちに衆議院議員)でした。

この炭鉱札の特殊なところは額面が「10 万斤きん」と高額で、100 円(明治末期だと 10 万円くらい)の価値がある点です。株券のような券だという説もあれば、取引業者に支払われた券だという説もあります。



筑前国鞍手郡勝野村鴻之巢御徳炭坑

筑前国鞍手郡勝野村^{このすごとく}鴻之巢御徳炭坑

(『筑豊石炭鉱業会月報』3(36), 1907)

10. 主な炭鉱④ 潤野炭鉱

2015(平成 27)年度後期の NHK 朝の連続テレビ小説「あさが来た」は、三井分家^{みつい}に生まれて大坂の豪商であった加島屋^{かじまや}へと嫁いだのち、夫とともに家業のために奔走した広岡浅子(1849-1919)がモデルとなったドラマでした。

加島屋のもっとも大きなビジネスとしては大同生命が有名ですが、家業の一環として明治中期には炭鉱経営も行っていました。広岡浅子が、ピストルを忍ばせて労働者たちと対面していたというエピソードでもよく知られています。

嘉穂郡潤野村^{かほぐんうるのむら}(現・飯塚市)にあった潤野炭鉱はその 1 つです。1899(明治 32)年には官営八幡製鉄所への石炭供給のために国に買収されてしまいますので、「^{ひろおか}廣岡」という文字がある炭鉱札はそれ以前のものです。



広岡浅子

出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/6003/>)

11. 主な炭鉱⑤ 西表炭鉱

これまで北部九州の炭鉱でなされた、炭鉱札^{たんこうさつ}の発行について紹介をしてきました。しかしながら炭鉱札は、北部九州以外の炭鉱や、炭鉱以外の鉱山などで発行されたものも確認されています。その中から^{いりおもて}西表炭鉱を紹介しておきましょう。

西表炭鉱は、石垣島の西方にうかぶ西表島で開発されていた炭鉱です。西表島では明治 20 年代頃から^{みつ}三井物産・^{おおくら}大倉組・^{しょうし}尚氏など大資本による開発が試みられましたが、それが挫折してしまいます。そして、明治 40 年頃からいくつかの小炭鉱が設立されました。

1916(大正 5)年に設立された西表炭鉱もその 1 つでしたが、1918(大正 7 年)には沖縄炭鉱と社名を変えてしまいます。そのため、炭鉱札の表面に書かれた「西表炭鉱」という表記は、2 年間しか存在しなかった貴重なものだといえます。

12. これからの炭鋳札

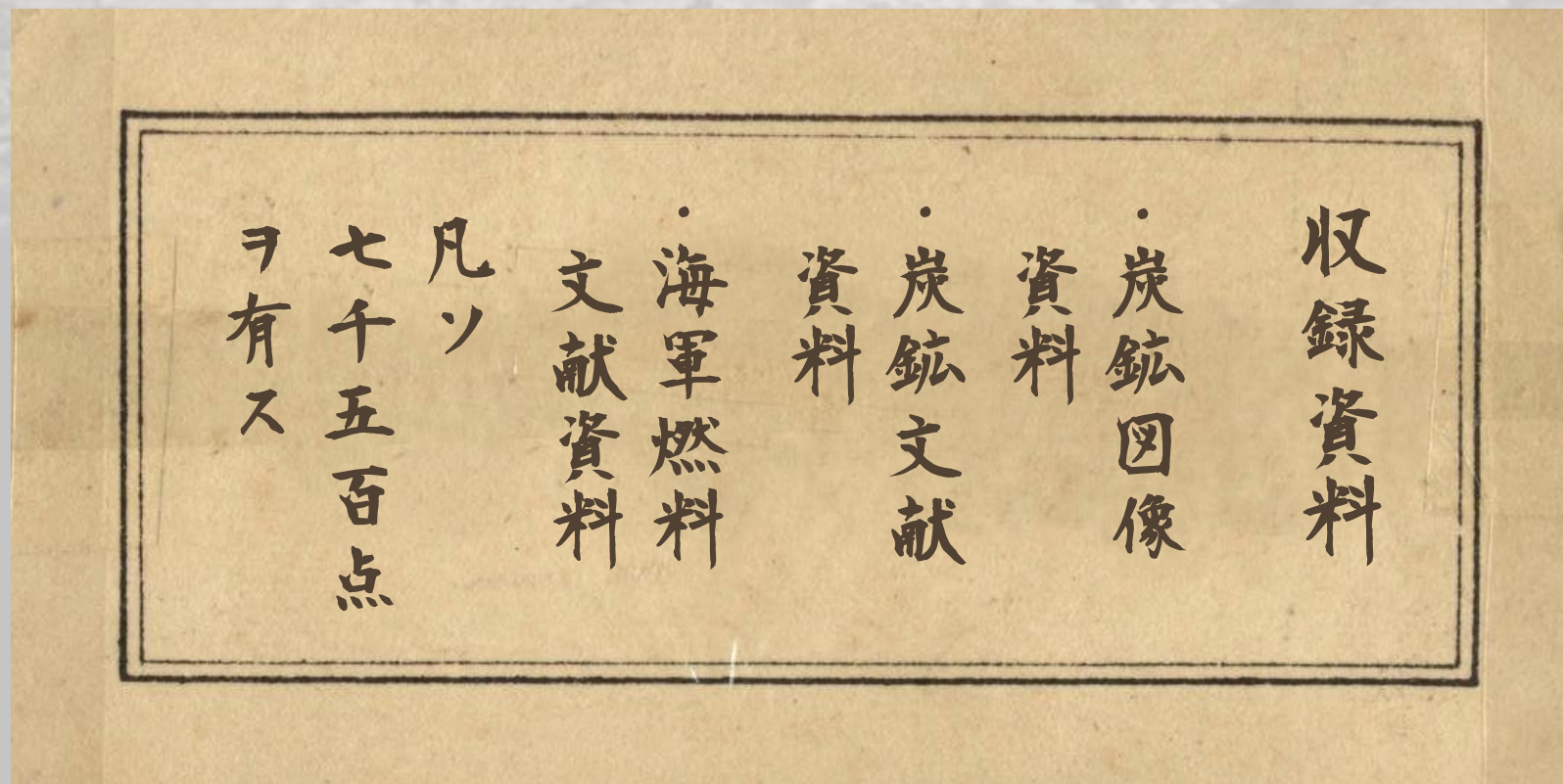
「はじめに」でも紹介しましたが、過去に発行された炭鋳札^{たんこうさつ}が 2,000～3,000 点ほどあると推察されているなかで、現存が確認されているのは 200 種類ほどです。残りの 9 割ほどの炭鋳札が、この世に残っているのか否かもわかりません。

炭鋳札は紙幣のような商品券のようなものですから、回収されて破棄されてしまったものも多いでしょう。一方で、記念に保存されているものもあるかもしれません。

現在は、ネットオークションなどでも炭鋳札が出品される時代です。より多くの未発見の炭鋳札が発見されることが、炭鋳札の分析の深化にもつながっていきます。そしてそれが、炭鋳の時代について深く理解することにもつながっていくでしょう。

炭鉱画像データベース

展示している炭鉱札を含む、炭鉱関係資料約7,500点をWeb上で公開しています



九大 炭鉱画像

